

地域の財産を生かし
南薩の魅力を
世界に発信していく

南薩地方を中心に、地域をプロデュースしながら地域づくりにつながる活動を行っているNPO法人「エコ・リンク・アソシエーション」の代表理事である下津公一郎さん。

平成21年に発足した「かごしまグリーン・ツーリズム協議会」の会長でもある下津さんは、さまざまな地域社会の課題を解決すべく、新たな社会還元的ビジネスや次世代の担い手育成に力を注いでいる。

そんな下津さんに、NPO法人の活動内容や最近増えてきたという農家民泊の実績、鹿児島島の農山漁村の魅力などについて伺った。

NPO法人エコ・リンク・アソシエーション代表理事

下津 公一郎さん

Koichiro Shimotsu

NPO法人の設立に 至った経緯を 教えてください

私が代表を務める「エコ・リンク・アソシエーション」は平成13年に南薩初のNPO法人として設立しました。きっかけは、ふるさとを元気にしたいという思いでした。

私は南さつま市加世田の出身で、山や川など、とにかく外で遊ぶのが好きな少年でした。高校卒業後、25年間鹿児島市内で働き、戻ってきたのは平成9年。その時感じたのは、人と人のつながりが少し希薄になってきているということ。ほかにも高齢化や過疎化など、さまざまな問題がありました。その現状を変えたいと思って始めたのが「万の瀬川アートプロジェクト」です。私は鹿児島市で画廊を営んでいたのですが、その経験を生かしてアートを地域づくりに役立てたいと考えたのです。



このプロジェクトは地元の万之瀬川を中心とした野外アート展で、川上まで流したものが川下に流れていくように、人はつながって生きているんだということを表現しました。自分たちの目に見える地域だけでなく、見えない部分にまで発想を広げればいろいろな課題の解決につながっていくのではないかと考えたんです。

そして南薩の魅力を、日本だけでなく、アジアや世界にまで発信したい。そう考え、これまでにさまざまな活動を行ってきました。そのうちの一つが民泊型教育旅行の受け入れです。

民泊型教育旅行には どんな可能性が

平成16年、私たちが受け入れた学校はわずかに2校、360人程度でした。それが今年には40校、1万人（ともに予定）にまで増えました。また、受け入れ地域も南薩だけでなく、県内各地に広がっています。われわれはそのコーディネートをしているのですが、たった1泊とはいえ、別れ際には涙を流す生徒たちも大勢います。そうやって思い出を胸に帰る姿を見ると、やって良かったなあと思いますね。

農家民泊というのは、第一次産業の

衰退、高齢化や過疎化が進んでいる地域を救う一つの解決方法として考えています。都市に住んでいる生徒は田舎の温かさに触れて感動する。地元の間にはあらためて田舎の素晴らしさや可能性を実感する。新たな収入にもなり、若い人材も集まってきます。これからは農業が主役になる時代だと、加世田に戻ってからずっと考えていました。それが今、少しずつ形になってきていると思います。

鹿児島も含めた 農山漁村の魅力とは

仕事柄、九州のいろいろな農山漁村に行きましたが、鹿児島は桜島がある分、どこの地域よりもおおらかに地元愛に燃えている気がしますね。皆さんおっしゃるのが、「自分たちの住んでいる地域には何にもない」ということ。でも決してそんなことはないんですよ。そんな地域ほど、探せばたくさん出てくるんです。ただ、それを探す時に必要なのは地元民以外の視点。地元では当たり前のことでも、外から見れば魅力のあるものはきつとあるんです。そこからどんなアクションを起こしていくかが大切です。

今後の課題としては次世代の人材育成を進めていくこと。そして今強

く思うのが、3月の東日本大震災以降、時代は大きく変わったのではないかとことです。昔はあつたけれど、便利さと引き換えに一度は私たちが捨ててしまったもの。これからは、それらを丁寧に組み合わせる時代になっていくのではないかと思いますし、だからこそ私たちの活動もこれまで以上に意味が出てくるのではないかと感じています。



県内各地で地域の魅力を高めるプログラムを作っている
(平成22年8月、薩摩川内市で実施されたワークショップにて)



奈良県の中学校から加世田を訪れた40人の修学旅行生
(平成22年5月、「南さつま交流センターにいなまる」にて)